

災害の来し方、行く末

水出 幸輝

(同志社大学社会学部メディア学科)

災害を「線」として考える

みなさまはじめまして。水出幸輝と申します。よろしくお願ひします。本日は「災害の来し方、行く末」というタイトルで、お話しさせていただければと思います。

まずは、簡単な自己紹介です。キャリアは長くありませんが、これまでは社会学やメディア論という領域から、自然災害について研究してきました。2019年に、『〈災後〉の記憶史 メディアにみる関東大震災・伊勢湾台風』¹⁾という本を上梓しています。これが、いわゆる私の「博論本」で、どのように過去の災害が語られたり、未来の災害が想像されてきたのかを、日本社会、あるいは地域社会といったスケールで辿った研究です。長期的な時間軸の中で災害をどう考えるか？ というのが私の設定した研究テーマでした。

主に扱ったのは1923年の関東大震災と1959年の伊勢湾台風なのですが、それぞれ約100年、約60年といった長い時間がすでに経過しています。つまり、それぞれに長い〈災後〉が存在していて、その長期的な時間軸において災害に対する認識がどのように変化してきたのかを、新聞報道の分析から跡付けてきました。簡単に言えば、日本社会において過去の自然災害がどんな水準で語られてきたのか、という話です。

そうした研究の中で強く意識していたことは、「点ではなく線で考える」ということです。「点」というのは自然災害が発生した時間的、空間的な「点」を指します。自然災害の研究は防災への寄与を要請される側面が強いため、「点」に焦点が当てられがちです。事実、私以前の研究者は、「点」を掘り起こすことで重要な成果を蓄積してきました。災害時における情報伝達やパニックの社会心理など、いわゆる災害情報学と呼ばれる領野で、それらは人文社会系の災害研究において代表的なものです。しかしながら、そこでは貴重な成果が生み出されてきたものの、「線」の議論はなされていません。「点」に固執することで、見落とされてきたこと、見えにくかったことがあったのではないかと考えています。

では、「線」の議論が抜け落ちているというのは、どのような事態か。たとえば、「過去の災害が忘れられてきた」とよく言われます。本当にその問題を議論するのであれば、どのように忘れられてきたのか、を知ることが大事ですよね。そうすることで、対処ができる。でも、「線」の議論が無かったために、どのように忘れられてきたかという忘却のプロセスがよくわかっていません。あるいは、「過去の災害の記憶は重要だ」と盛んに言われてはいるけれど、「これまでずっと重要なものとして扱ってきたか？」と問われれば、実はあやしい。過去の災害の記憶がずっと重要だったとすれば、記憶を忘れるはずがないですよね。忘れられているのだとすれば、社会で重要なものと考えられていなかった時代があるはずですよ。

そうした人びとの災害認識を解き明かすことが私の研究でした。「点」ではなく「線」として、長期的な時間軸の中で災害をどのように考えるか。本日の報告タイトルにした「災害の来し方、行く末」にもそういった意味を込めているので、アイデアになるようなお話ができればと思います。

関東大震災の〈災後〉

具体的に、1923年9月1日に発生した関東大震災を考えてみましょう。震災後の火災による被害が甚大で、死者・行方不明者は10万人余り。観測史上最大規模の被害をもたらした地震災害です。現代社会において常識のように語られるこの地震は、メディア文化にもしばしば登場します。それだけ重要な、過去の地震記憶として位置付けられているわけですが、ずっとそうだったのか？ 詳しくは、拙著『〈災後〉の記憶史』を読んでいただきたいのですが、関東大震災ですら長い〈災後〉の中で記憶認識は大きく変化してきました。重要な記憶として顧みられる時代もあれば、そうではない時代もあり、また、記憶を思い出すロジックも時代によって変わります。

関東大震災は6年半後の1930年3月に、「帝都復興祭」という復興を祝うお祭を大規模に実施。そこで、「復興は完了した」と宣言します。そのため、「帝都復興祭」以降、

震災は過去のものとして語られるようになっていきます。つまり、現在進行形の課題として復興が目前に存在していた時代から、過去の出来事へと震災の位置付けが変化したわけです。過去形に記憶の語り口が変化したことは、記憶の持続性にも影響します。

言うまでもなく、目の前の課題であった方が語りやすいわけで、過去形になったことで忘れられていってしまいます。この忘却のスピードには地域差があって、東京と大阪を比べると、大阪は一気に忘れていって、東京はゆるやかに忘れていきました。これはやはり、当事者性の問題があったかと思えます。東京においては空襲火災の備えのために震災火災の経験を想起する、という文脈がありました。大阪も当初はそうした動きがみられるのですが、持続していきません。経験がない分、想起のロジックを維持できなかったわけです。

また、注目すべきは、1945年以降の動向で、戦後ある時期までは東京においても関東大震災の記憶認識は低調になります。終戦を経て空襲への備えが必要なくなったために、関東大震災を思い出すロジックもなくなってしまったんですね。東京で発行される新聞報道の中でも関東大震災は語られなくなり、忘却へと進んでいく。



図 『朝日新聞』 1953年8月31日

1953年、震災30周年の『朝日新聞』の記事が象徴的なので、紹介します。図で示したように「荒れ果てた記念堂 参拝者なく修理維持も困難」という見出しがつけられた記事です。見出しからも明らかなように、記事では震災記念堂（現、東京都慰霊堂）に参拝者がほとんどいなくなり、その空間が「荒れ果てて」しまっていると嘆いています。写真のキャプションには「30周年を迎える寂しい震災記念堂」とあり、関東大震災の慰霊堂が忘却の象徴になってしまうくらい、関東大震災の記憶認識が低下していた様子がうかがえます。東京において関東大震災の記憶が忘れられるような出来事になっている。「災害の記憶が大事だ」という認識が100年間ずっと維持

されてきたわけではないのです。

もう少し時代が進むと、1975年に『手記 関東大震災』という本が出ています。これは一般の人が体験した関東大震災の手記をまとめたもので、監修は社会学者の清水幾太郎が担いました。彼も関東大震災の被災体験を持ち、ある時期から震災を盛んに論じるようになるのですが、注意すべきは冒頭で清水が「長いあいだ、私はこういう書物がつくられるのを待っていた」²⁾と記していることです。著名な「メディア知識人」であった清水は、自分自身が被災体験を有していたこともあり、関東大震災に思い入れがありました。だからこそ、こうした本を作りたかったのですが、作ることができなかったんです。それは、関東大震災の記憶が社会的に重要な記憶と考えられていなかったからです。裏を返せばこの本が刊行された1970年代に、関東大震災の記憶は再び重要なものと考えられるようになっていたわけです。戦後、忘却の危機に瀕した関東大震災の記憶は再び重要なものになっていたのです。

「防災の日」という語り口

記憶は普通、ゆるやかに忘れられていくものです。なので、終戦後に忘れられた関東大震災の記憶が1970年代に重要なものになっている、というのはやや特殊な状況なのですが、特殊な状況を作り出した仕掛けがこれ以前に存在します。それが、1960年に「防災の日」という災害の記念日が制定されたことです。前年の1959年に伊勢湾台風の被害を受け、「防災が重要だ」という意識が高まったことで誕生した記念日でした。

伊勢湾台風は名古屋・三重を中心に、死者・行方不明5000人を記録した大災害で、1995年に阪神淡路大震災が起こるまで、戦後最も多くの人命を奪った自然災害でした。日本現代史において非常に重要な自然災害なわけですが、伊勢湾台風の記憶は特定の地域を除いて社会的には忘れられています。「私は覚えている！」と語る人もいられないかもしれませんが、メディアの語りではほとんど出てきません。阪神淡路大震災までの約30年間、戦後、最も人命を奪った自然災害であった伊勢湾台風はあまり記憶されてこなかったのです。

ここには災害の記念日をめぐる想起と忘却のメカニズムが存在します。「防災の日」の日付には9月1日選ばれました。なぜこの日なのかといえば、関東大震災の記念日だからです。関東大震災の記念日を「防災の日」とすることで、9月1日には新たに社会的な意味が付与さ

れました。メディアも一生懸命に防災キャンペーンを展開していく。9月1日の報道はその日付に注目し、関東大震災の震災記念日であることを繰り返し指摘しました。一方、「防災の日」が伊勢湾台風をきっかけに制定されたという創設経緯はほとんど語られません。このようにして関東大震災が思い起こされ、伊勢湾台風は忘却されていったのです。

ポイントは、関東大震災の記憶が重要だったから「防災の日」として9月1日が選ばれたわけではないということです。先ほど述べた通り、関東大震災はほとんど忘れかけられていました。その時代において重要な記憶と位置付けられていませんでした。おそらく、忘れられているからこそ、思い出すために（重要な記憶として位置づけるために）記念日を用意した。一方の伊勢湾台風は「記憶が鮮明なので忘れるはずがない」という感覚があったのかもしれませんが。ですが、「防災の日」だけでなく記念日となりうる9月26日にも、全国紙は伊勢湾台風を語ってきませんでした。毎年繰り返して語ってきたのは被害が大きかった名古屋に拠点を置く『中日新聞』で、『中日新聞』の販売エリアには想起のタイミングがありましたが、全国的には忘れられていった。つまり、現代における関東大震災の記憶は、伊勢湾台風の忘却の上に成立していることとなります。

記憶語りをいかに用意するか？

現代社会というのは、肌感覚の通り、災害の記憶が重要視されている時代です。それは、東日本大震災による甚大な被害がもちろん影響しています。ですが、それだけではなく、関東大震災、伊勢湾台風、阪神淡路大震災といったように、いろんな災害の積み重ねの上に、現代の自分たちがあるんだと意識することが大事なのではないかと思います。

なぜかという、災害の記憶の歴史はかなりの程度、忘却の歴史だからです。個別の小さい災害は当然ながら、関東大震災ですら一度は社会的に忘れていた。戦後、たくさんの人命が奪われた伊勢湾台風もやっぱり忘れていた。伊勢湾台風の例を見れば明らかですが、「この災害はすごい被害だから忘れるはずがない」という考え方はかなり危ういわけです。裏を返せば、何が記憶を駆動しているかということ、定期的に思い出さないと忘れてしまう、という焦りです。忘れられているからこそ、思い出すために記念日を用意した関東大震災が良い例なのですが、忘れそうだと、忘れそうだと繰り返し語ることで、い

つしか社会に定着している、という逆説的な現象もありうるのです。

また、焦りに加えて「記憶を語るロジックをどう用意しておくか、も今後考えるべき課題だと思っています。防災だけでなく、複数のロジックを用意することができれば、記憶をかなり延命させることができるのではないのでしょうか。私はそうした点に注目して、マスメディアの営みを研究してきました。ですが、マスメディアだけではなくいろいろなメディア文化の中で、語り口を残しておく必要があります、人々の対話の中にも蓄積を作っておく必要があると考えています。いつ襲うかわからない災害には油断せず備えることが大事ですが、災害記憶の維持も同じように「油断大敵、なのだ」と思います。

注

- 1) 水出幸輝、2019『〈災後〉の記憶史——メディアにみる関東大震災・伊勢湾台風』人文書院。
- 2) 関東大震災を記録する会編、清水幾太郎監修、1975『手記 関東大震災』新評論、1頁。

